

# J.-J. ルソーにおける自然空間の諸相と

## 「化学論」に見る生態学的認識

### — 研究序説 —

荒井宏祐

## A Study of J.-J. Rousseau's Ecological Insights in "Les Institutions Chymiques"

Hirosuke ARAI

### Abstract

The aim of this paper is to show more clearly J.-J. Rousseau's insight into ecological systems in the 18th century.

"Les Institutions Chymiques", written by him, from 1745 to 1747, includes many ecological observation and reflections on the relations between the inorganic world and organic life.

First, I introduce these ideas, and examine their distinctive characteristics, comparing them with those of Encyclopedists.

Second, by pointing out the particular characters of Rousseau's external, physical experiences and natural sensibilities, I demonstrate the significance of his ecological understanding in his thoughts on Nature.

Finally, I emphasize and clarify the importance that Jean-Jacques' unfinished work (mentioned above) continued to hold until the end of his life, a work which was published entirely only at the beginning of 20th century, after being unknown for more than one hundred years.

### はじめに—本稿の目的

今日、我々は「自然」の語を、ごく日常的には、山川草木など自生的な自然物や、人間界とは別にある自然界全体または宇宙や物理的な世界を指すのに用いるか、あるいは「ひとりでにそうなる」という意味で「自然に」などと副詞的に使っている。しかし「自然」の一語は、これまでの人類の思想的な歩みが少しずつ積み重ねてきた多くの意味を含む、多義語である。この語はまた、自然状態、自然法、自然権などの言辭を作って人工・人為が不在であったりそれを超えてい

る状態や既存の制度など人間の作為を批判しうる規範的・倫理的価値を持ってきた。こうした多義性は、現在の辞書・事典類にもなおとどまっているのを見ることができる。しかしそれらに比べると我々の日常的な用法は、きわめて限定的であるといつてよかろう。もっともこの倫理的な意味は、近代以後、自然資源の全面的利用活動の大規模化期には、使用頻度が少なくなっていたようであるが、しかし近年環境問題に当面するに及んで、「地球または環境にやさしいライフスタイル」など、「自然」は再び現代的生活様式の変革を迫る規範や規準の意味としても再使用されるようになってきた。

またそれとともに、より基本的に「自然」の理解に多次元的なまなざしを向けることにより「現在の自然理解に思想史的展望を与えようと試みる<sup>(1)</sup>」ものもあらわれてきた。

小稿はこうした中で、近代の出発期に当たる18世紀前期までの「自然」の語義をふりかえったのちに、百科全書派の自然観とJ.-J.ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712年～1778年) の自然観の対立に触れた。

ルソーの「自然」の一つは、生態作用を持つ「環境」としての自然で、彼はそれを『人間不平等起源論』(以下『不平等論』という)で示していることはすでに拙稿<sup>(2)</sup>で指摘した。しかしその後の検討により、実はこの観念は、ルソーが『不平等論』の完成に先立つ9～7年前(1745年～1747年)に手がけた『化学論』(Institutions chimiques)に明確にあらわれていることが探求された。今回はその内容の一端を述べるとともに、こうしたルソーの生態学的認識を検討することの意味についてもあわせて言及した。

また彼は、生態作用を内に秘める自然界の諸相を多様に描いており、その特徴のいくつかはこれまでの拙稿<sup>(3)</sup>でも取り上げたことがある。小稿では「化学論」の考察に先立って、以後の検討結果を報告する。自然空間の中に深く入り込み、その諸相を鋭敏な感覚で伝えるルソーの姿は、いわば自然への自己言及的態度を打ち出した18世紀の1人の人間の姿を示すものでもあろう。

これらにより小稿は、ルソー研究の基底の一つを成す、「自然」の分析の一助となることを願うとともに、多次元的な「自然」理解の視線の一つを示唆しようと試みるものである。

## 1 『百科全書』など18世紀前期までの「自然」の多義性<sup>(4)</sup>

### (1) ボイル、ダランベールの分類とメルシエの集約

1751年、「私たちの諸観念の起源と生成にまでさかのぼる<sup>(5)</sup>」ことをめざして『百科全書』の第1巻が刊行された。そこで編集者たちは《自然》の項目が当時の著名な博物学者ビュフォンによって近く執筆されるだろうと予告した。彼らはこれを喜んだが、その理由は「自然」の語が多用されながらもその意味するところが非常にあいまいで十分良く定義されておらず、啓蒙思想家たちができることは、それを単に「濫用 (abusent) することだけだった」ので、ベストセラー『博物誌』の著者がこの語の意味を明敏かつ的確に、また品位を持って説明することを期待したからだとされている<sup>(6)</sup>。

たしかに「自然」(Nature, Natura, Physis)の一語は、その語義の歴史的展開を述べた諸研究を一見しても、アリストテレスによって「自然について語る者」、「自然学者」と呼ばれたソクラテス以前の哲学者たちが「自然万有、自然の総体を彼らの主たる関心<sup>(7)</sup>」として以来、18

世紀に至るまでの間も、その後のギリシャ、ローマの哲学者、中世の神学者、近世の思想家などによって吟味、検討がつづけられ、語義の多様化、深化が進んだことが知られる<sup>(8)</sup>。

『百科全書』の「自然」の項目は結局ダランベールの署名のものが掲載された。「人間の自然」の「名誉回復」(Réhabilitation)を論じたR.メルシエによると、ダランベールは17世紀末のイギリスの自然学者(Physicien)、化学者、物理学者のロバート・ボイル<sup>(9)</sup>の語義分類から刺激を受けて、それを新しい秩序のもとに組み変えたとのことである<sup>(10)</sup>。ボイルの分類とは次のようなものであった<sup>(11)</sup>。

- 1 自然の創造者(Natura Naturans—生む自然、能産的自然)
- 2 あるものの本質(Quidditas<sup>(12)</sup>—通性原理)
- 3 生れつきある諸性質
- 4 ある存在における運動の内的原理
- 5 事物の安定した秩序
- 6 個人の気質または世界(Univers)の体系
- 7 世界そのもの
- 8 世界(le monde)を支配する半神(Une semi-divinité)

メルシエは、ダランベールの分類を中略をまじえつつ紹介しているが<sup>(13)</sup>、その要点を箇条書きで整理すると次のようになる。

- 1 世界(monde)の体系、宇宙(l'univers)の機構(machine)、またはすべての創造物の集合体
- 2 多様な非精神的及び物理的創造物あるいは被創造物の一つ一つ……
- 3 あるものの本質(l'essence)……またはスコラ哲学者たちがクィディテ(quiddité—通性原理)と呼んでいるもの
- 4 事物の秩序または自然の成り行き(le cours naturel)、第二原因(Causes seconds—第一原因である神に依存する低次の原因群)の連鎖あるいは神が確立した運動の諸法則
- 5 創造された存在がその定められた目的へ達するために、それらの存在に伝達される一種の神聖な技術(art divin)……
- 6 一つの物体、とくに一つの生命体の能力または機能の連合……
- 7 摂理(providence)の作用、万物の原理、つまり、すべての物体に若干の特質を与えるかまたは若干の効果を生み出すために、それぞれの物体に働きかけるあの力、即ち霊的存在(être spirituel)……
- 8 創造者(le Createur)によって確立された運動の諸法則に一致する物体相互の作用

メルシエはさらに、18世紀を通じて「自然」の語義の明確化の努力がつづけられたが、後代の専門的研究によってもその結論はいつも同じで「18世紀においてこの語の用法は、もっともあいまい(le plus vague)にされた」というものだったとも述べている<sup>(14)</sup>。

メルシエ自身も18世紀前半までの「自然」の語義の要約を試み、結局四つの主要概念に還元できるとした。それをさらに簡単にまとめてみると、次のようになる<sup>(15)</sup>。

- 1 本質という哲学用語に対応するもので、あるものまたは存在を、それによってそのものたらしめているもの、それらがその出生または定義上持つ特性の総体。

これは自然(nature)の語が「生まれ」(naître, ne')を意味するラテン語(natura)を語源として派生したためである。それ故、生命体では生得的なものであり、《根本的、根

源的諸性向》(dispositions) で、教育に対立するもの。《自然の声》という言い方も、この意味で用いられる。また多くの場合倫理的な意味を帯び、自発性、真正性を表わすもので、慣習、人為に対立する。この意味ではほとんどの場合単独では用いられず、《素朴な自然》(simple nature)、《自然の権利》や《美しい自然》など価値を強調するような形容句を伴って使われる。

2 宇宙にあるすべての存在と事物の集合。同時に一つの統一体と見られる宇宙の一部をも意味する。とくに後者は18世紀で精神的、理性的存在として、自然の中で明確な一領域を形成した人類を示す。従って《神の自然 (nature divine)》が神 (Dieu) の代わりに用いられるように、《人間の自然》(nature humaine) が人類または人々という語の代替を勤めた。

「自然」の語は、次第に世界を形成する存在や事物の無限の多様性を意味するに至ったが、おそらくこれは18世紀を通じての自然科学の進歩が貢献したのであろう。

3 種としての一団をなす存在や事物において、個体の特性としてよりも、もっと頻繁にあらわれる種に属する特性。学者が宇宙の諸法則を発見する以前に、人々は規則的に繰り返しあらわれる物理現象が恒常的な法則によって生み出されるものと推測していた。この物理界の秩序・諸法則の体系も同じように「自然」の名称で呼ばれたが、この秩序には必然と強制の二つの性格があるとされた。この意味で「自然」と呼ばれるものは、超自然性 (sur naturel) や人為性 (artificiel) と対立するものであった。この物理的法則が神の叡知の表現であり、一つの卓越した力の作り出したものとされると、道徳的法則にも適用され、《自然に従う》という原則を採用するエピクロス派やストア派の道徳の源泉となった。

4 神を示すスコラ神学的な「生む自然 (natura naturans)」。「生まれる自然 (natura naturata)」とは区別される。古代の哲学者が主張したものと異なるが、スピノザの汎神論などもこれに近い。非キリスト教的な18世紀では自然は、しばしば宇宙を組織する力と理解されたが、一方キリスト教の根強い影響もあって、自然は一種のアイオン (éon)、即ち神の身代り…神と被造物との間の一種の中間的な存在 (une espèce d'être moyen) …となった。それでも自由思想家は、神を自然に完全に還元する傾向があり、またキリスト教徒自身も自然という語を神の摂理と同一視して使うようになった。その結果18世紀では自然性と道徳性の混同が保護され、神無き宗教、即ち自然崇拜が広がって、弱体化したキリスト教の代用品 (le substitut d'un christianisme) になった。

以上の三者の分類を一見すると、まず三者の共通点は「半神」、「霊的存在」「神の叡知」などの神秘的な表現と、「運動の内的原理」、「宇宙の機構」、「宇宙の全存在と事物の集合」など機械論的な表現が混在していることがあげられる。この特徴からは、「自然」があいまいな語義を持つ言辞ではあるが、逆に複雑かつ多義的であるということは、それだけさまざまな思想活動を展開する上で多様な使用を許す余地を持つものであり、その意味では当時の思想活動に重要な言辞の一つであったことがうかがわれよう。また神秘的表現と機械論的表現の混在は、自然観に関して17世紀末から18世紀前期が、まだ近代以前から近代に移行しつつあった時期であることを示唆しているものとも思われる。

ボイルとダランベールの8義を比べると、ボイルの方が「6」を除いて同じ項目の中に「または (ou)」という接続詞がなく、相互に独立性が強くて単純化された分類となっている。これに比し、ダランベールは8義中6義にこの接続詞があり、期せずして「自然」の多義性、複雑性を

もっともよく伝える内容となっている。メルシエの四概念はこれに比べると、かなり集約的な分類になっているようである。

ちなみに1974年に『自然に対する人間の責任』をあらわしたJ.パスモアは、「『自然』という言葉は避けられるものなら完全に避けたいと思う。しかしそれが最もあいまいな言葉の一つであるとしても、それは英語のなかで最も不可欠な言葉の一つでもある。」<sup>(16)</sup>と述べている。彼はまた、メルシエが参照したボイルの同じ論稿<sup>(17)</sup>を読み、そこから次の文章を引用している。

「人々が自然と呼ぶものに対して明確に抱いている尊敬の念は、神の下等な被造物を治めようとする人間の絶対支配に対して思わしくない障害物となってきた。なぜなら多くの者はそれを達成不可能なものを見なすにとどまらず、それを不敬な企てのようにも見なしているからである<sup>(18)</sup>。」

そしてパスモアは、次のように述べている。

「自然が『尊いもの』であり、これを制御し改造しようとする企て、あるいはこれを理解しようとする企てさえもが不敬なことだと考えられている限りは、科学と技術の進歩はありえないだろう、とボイルは提言しているのである。かれがこの点を問題にしなければならなかったということは、古来の考えがけってして消滅していなかったという事実を物語るものである。<sup>(19)</sup>」

これらは、20世紀の哲学者が自然と人間の関係を考える時、今なお、「自然」の言辭はあいまいと感じていること、しかしこの語は不可欠な言葉であること、またボイルが自然観の移行期を生きつつ、そこで近代に向けた新しい科学的で機械論的な自然観の普及にも努力したと見ていることを物語っていると思われる。

## (2) 百科全書派とルソーの自然観の対立

『百科全書』は、その編集方針の一つとして「工芸を重視し、その技術の集大成を計った<sup>(20)</sup>」が、同全書は現代では「産業革命に到達すべき社会を代表する思想の総括的表現として近代の主流をなす<sup>(21)</sup>」と位置づけられている。ダランベールが「自然」の項目を起稿する時、ボイルの分類に刺激を受けたということは、ボイルの自然観がのちに見るような百科全書派の、人間による自然資源利用を志向する自然観の正当化に資する所があると見られていたからかもしれない。

他方『百科全書』は、「最初ルソーを包み、のちこれと対立するにいたる<sup>(22)</sup>」もので、事実ルソーは、こうした「人類文化の発展の表裏にきびしい批判を下していた<sup>(23)</sup>」とされている。例えば『百科全書』には、「博物学あるいは一般に自然の学は有用でなければならぬという考えはずいぶん露骨<sup>(24)</sup>」に出ているとされている。具体例をあげると、『博物学』の項で「土地をいっそう稔り豊かに、人間の必要物をいっそう多く取ること、それに寄与する以上に重要な探索があり得ようか。こういうことこそは、自然学者、すべての種類の知識人、良き市民にとってもっともふさわしいものである」(ディドロ<sup>(25)</sup>)と述べられている。これに対しルソーは、既に拙稿<sup>(26)</sup>で触れたように、森林の農耕地化は「奴隷制と貧困」を生長させるとして激しく批判した。また博物学の「一部門」である植物学は医薬などの実用目的よりも、純粋な自然研究の対象であり、植物学者は実用研究から自由であること、さらに植物は、人間の利用価値とは独立の生命的価値を持つことを説いている。百科全書派とルソーの自然観の対立は、脱自然状態化=近代化、産業化をめぐる対立を背景を持つものである。結局百科全書派は、多義的で多価値的な「自然」の分類を『百科全書』に持ちながら、人間中心主義的な自然利用という、自然観の一義化に傾き、

ルソーはそれに反発するように独自の自然観を付け加えて「自然」を益々多義化していく。これは近代化の出発期における自然観の、根本的な対立の原点を示す例の一つとも思われる。この点はなお、別の機会に詳しく考察することにしたい。

## 2 ルソーの自然観の構造と自然空間の諸相

### (1) ルソーの自然観の構造に関する先行研究

まずルソーの「自然」の多義性とその構造を、先行研究例の簡単な紹介により一見しておきたい。

ルソーの自然観を、古代ギリシャの自然哲学からストア主義を経て、百科全書派のディドロに至る自然観の変遷探求の中で扱った論文が、「ルソーとディドロにおける自然の観念<sup>(27)</sup>(1)~(5)」(舟橋豊)(以下「舟橋論文A」ということがある)である。著者はここで、ルソーにとっての自然は「神であり、宇宙を統べる整然たる法であり、人間界の正にして善なる自然法であり、崇高美あふれるアルプスの山河であり、さらには生まれながらにして善なる人間の本性でもある。<sup>(28)</sup>」と簡潔にまとめている。これによればルソーの自然の観念は、1 神、2 宇宙を統べる法 3 人間界の正にして善なる自然法 4 アルプスの山河 5 生れながらにして善なる人間の本性 の五つに区別される。これらには前節で見たような、18世紀前期までの「自然」の多義性の影響も見受けられようが、この論文では、さらにルソーの「自然」の観念の構造を検討している。この骨子をごく簡略に述べると、まずルソーにおける宇宙と自然、神と自然は次のような関係になる。彼の宇宙観は「ボイルやニュートンと同じような機械論的解釈<sup>(29)</sup>」だが、ただルソーは地球の規則的な運動の第1原因として、世界の秩序の確立者として神を想定している。その神はいわば「姿なき設計者」で、世界を創造したあと姿を隠したが、残された自然は「いたる所に神の知恵と善意の印をとどめて<sup>(30)</sup>」いることをルソーは感じる。従って「ルソーにあっては、自然と宇宙とは一枚の硬貨の両面に相当<sup>(31)</sup>」する。この硬貨の両面は「それぞれが…「生む自然」*natura naturans* (かりにAとする)と「生まれる自然」*natura naturata* (かりにBとする)にはほぼ対応し……前者が原理的かつ神的な「自然」……後者は原理から派生した合理的機械としての自然即ち「宇宙」で……両者の一体化したのもまた「自然」(かりにCとする)<sup>(32)</sup>」と呼ばれる。つまりルソーの自然は、「 $C=A+B$ <sup>(33)</sup>」という構造を持つわけである。またここで「自然Cは、〈sensible〉な人間に対してだけ……自然Aを啓示する。またそのような人間は自然B=宇宙を通してその背後にあるAを見る……彼には裏面から表面が透けて見える<sup>(34)</sup>」。

なお、「宇宙(B)は神的自然法則(A)に従ってただ受動的に運動する機械仕掛の時計<sup>(35)</sup>」であるが、「自然(A)は、神の掟・秩序・知恵・善・美」で、これが人間に伝達されると、「人間の本性の中に置かれて、内的自然(A')となり、良心・本能・心情……と呼ばれる<sup>(36)</sup>」。そしてこの良心に神の声が自然の声として届けられるので、この良心の声に耳を傾けることが「自然に従う」ということになる<sup>(37)</sup>。

以上かなり内容を省略した紹介であるが、この論文は、前述のように自然観の変遷を古代ギリシャから辿ったもので、その克明な分析とともに、複雑・多様なルソーの自然観の構造の明解な吟味には学ぶべき所が多い論稿であるといえよう。

舟橋にはほかに「自然征服」思想と自然観(1)~(3)<sup>(38)</sup>がある(以下これを「舟橋論文B」ということがある)。ここではまず「人間中心主義にイデオロギーと正義の法の支援を得て、今や人間は地球の自然と環境を倫理的かつ合法的に収奪し破壊することを許され……自然の生態系はこのために寸断と破滅の危機に立たされている。<sup>(39)</sup>」としている。そして論文の主題を、そうした「人間中心主義のイデオロギー」を許した自然観の転換の検討に置き、その変遷の歴史を前述の「舟橋論文A」とは逆に、デカルトなど近世の自然観から中世、さらに古代ギリシャの自然観へと遡及的に辿っている。

その中でルソーの自然観については、彼は「都市文明が、……農村共同体的な素朴で自然な美德を荒廃させ<sup>(40)</sup>」るとした。ルソーにとっての「理想の社会は人為よりも「自然」を生存の原理とし、自然の法や自然の声(良心)に従って組織・運営させる<sup>(41)</sup>」ことで、「自然は神と密着し、……自然の到る所に神は偏在していると考え……自然尊重の価値観<sup>(42)</sup>」を持ったと述べるにとどまっている点が特徴的である。

なお、この論文の最後で著者は、「自然と人間が共に破滅を免れる唯一の道は、「自然との対決」を核とした思考枠を取り払い、代りに「自然との共存」を核とした新しい思考枠と自然・人間観を確立することで…従来の人間至上主義的・自然征服的な…思考枠…を転換し、意識の変革を實現」する場合「とりわけ自然観の歴史は…貴重な教訓を与えてくれる。<sup>(43)</sup>」としめくくっている。

## (2) ルソーにおける自然空間の諸相

### ア 自然空間描写のひろがり

ルソーの「自然」の構造は、前節で自然C=自然A(神)+自然B(宇宙)と人間の内的自然(A')とされた。ルソーはこうした構造を持つ自然界の諸相について大量の描写を残している。

他のルソー研究でもこの自然空間描写について多くの検討がなされてきた。その中の一つが良く読まれてきた岩波新書『ルソー<sup>(44)</sup>』で、とくに第5章「自然のよろこび」に多くの例が述べられている<sup>(45)</sup>。そこでは「ルソーの自然は……多義的なことばだ<sup>(46)</sup>」としているが、「直接性、無媒介性…あいだに人工や金銭が介在しない状態<sup>(47)</sup>」をルソーの「自然」の特徴と見ている。

この章で示されているルソーの自然空間の描写にかかわるところを簡単にまとめてみると、次のようになる。

- ① ルソーの愛する自然……「無媒介の、澄明のまじわり」のできる、「美しい」自然、「心地よく、なごやかで」「やさしい」「微笑する」自然、「平野」よりも「急流……くらい森、両側の懸崖」などの自然
- ② ルソーが、そこからある意味を引き出す自然……「物理的自然の斉一性」、「生物的自然の協和」、「神にまで近づく」自然、「ルソーの思索のもっとも強いバネ」となる自然、政治、産業に迫害される自然、強者に圧迫される弱者を象徴する自然(大きい島の修復のために削られていく小さい島)、ルソーの「理念としての自然の原型をつくった、スイスやフランスの田園」
- ③ ルソーの描写の特徴を成す自然……「空想でふくらんだ自然」「すでに文明になじんだ、

いわば人間化された」、「素朴」な「文化が…ふくまれている」自然、過去の幸福へ回帰させる自然、感覚的に表現され、文学的価値を有するに至った自然、「自然に対する美意識を革新した」自然（山岳）、人と「交感、交響」する自然

- ④ ルソーの「自然」のイメージから外れる自然…「ちみもうりよりの荒れくるうすさまじい自然」、「未開のジャングルやゲルマンの森」、「力づくで征服したり、機械で観察する」自然

ルソーの膨大な著作には無限につづくかと思われるほどのさまざまな自然空間の描写があるが、この第5章はそうした多様な自然描写を少ない頁数でコンパクトにまとめている。

#### イ 自然空間描写の非一様性

以下これらにコメントを加える形で、ルソーの自然描写のさらなる広がりとは非一様性を見ておきたい。

上記のまとめ①にある「美しい自然」、「なごやかでやさしい自然」は、また、政治的、社会的迫害に傷ついたルソーの自我を治癒する自然であった。それは「かれらがあたえたあらゆる苦しみを忘れさせる」ものであり、また人間の実用的価値とは独立の生命価値を持つ自然でもあり、さらに、エミールに対する自然宗教教育の教室にもなる自然であった。

また、まとめ②に「生物的自然の協和」とあるが、ルソーは、植物の種ごとの「通有性」や生物種の多様性が持つ生命感、自然の「三つの領域の諧調」の魅力などを美しく描写している。次章で触れる生態作用を秘める生態的自然の描写も、この生物的自然の一つを成す、生態系としての協和を示すものでもあろう。

③では、「すでに文明になじんだ、人間化された、素朴な文化がふくまれた自然」がある。ルソーは、この文明化、人間化の程度がさまざまである多様な、「文明化、人間化された自然」を愛したようで、上記①の「急流…くらい森、両側の懸崖」は一見、文明化されていないようだがそこには「危険をふせぐために道ばたに手すりがつくってある<sup>(48)</sup>」のである。

なお、ルソーには、「おかしな趣味があって断崖絶壁が好きなのも、目まいを愛するからである。身が安全であれば、この頭のくらくらするのがたいへん好きなのだ。<sup>(49)</sup>」としている。ルソーにとって自然界は、上記②にあるように神に近づいたり、思索のもっとも強いパネになるばかりか、一種の遊びの道具にもなっているのである。

ここで、「文明化、人間化された自然」の非一様性を、ルソーの「sauvage」（未開、野生、野蛮などを意味する。）という言葉の用例から見てみよう。彼は、ある研究で「しばしば、《sauvage》という言葉を使う<sup>(50)</sup>」と指摘されたが、「未開、野生」の意味の用例の一つが上記③の山岳で、ルソーは「山々の未開の姿」（le sauvage aspect des montagnes<sup>(51)</sup>）や「巨大な氷を大古以来（depuis le commencement du monde<sup>(52)</sup>）頂いている氷河と呼ばれているアルプスの一部」の景観を好んでいる。サヴォワの助任司祭がエミールに自然宗教を語る場所も、ポー河の流れとともに「巨大なアルプスの山なみ」が一望できる場所が選ばれた。

ちなみに第1章で述べたロバート・ボイルは1639年、12才の時にグランドツアーに出かけ「アルプスに恐怖を感じる」体験をしたとある伝記が伝えている<sup>(53)</sup>。この伝記は、ヨーロッパではアルプスが観光の対象となったのは18世紀中葉以後で、17世紀中葉以前とは「その自然に対する根源的な感性の点で隔絶がある。……この隔絶を象徴するのがルソーの名である<sup>(54)</sup>。」と述べている。これによると、ちょうどこの時期のアルプスは観光地化直前



の状態、まだあまり文明化されていない状態にあったとも考えられよう。第5章が言うように「西洋ではそれまでみにくいものと考えられていた山が、ルソーを経ることによってはじめて美しいもの、心をそそるものとなった」のである。

ルソーはまた「野生的で荒涼たる隠れ家」(Un réduit sauvage et desert<sup>(55)</sup>)を好み、「自然は人の出入りする所を避けます。自然が最も胸を打つ魅力を繰りひろげるところは山の頂や、森の奥や、無人島です<sup>(56)</sup>」と言っている。

このsauvageという語が、読者の意表をつく、一種のレトリックとしても使用されていることも、「文明化された自然」の非一様性を物語っている。

『新エロイズ』の中にあるヴォルマールの果樹園は、主人公に「自然界の中で最も未開の (le lieu le plus sauvage de la nature), 最も寂しい場所を見る思い<sup>(57)</sup>」をさせた。しかしこの場所は実は「人間の細工」の跡を消すようにヴォルマールが「指導<sup>(58)</sup>」した場所、つまりもっともsauvageに見えるように文明化された自然であったのである。

ルソーの自然は、③にあるように「空想でふくらんだ自然」であろうが、彼の「すでに文明になじんだ、人間化された、素朴な文化がふくまれる自然」は、牧場や田園、大都会の近くの森など、人間化、文明化の程度が著しい自然から、道ばたに手すりがつくってある懸崖のように、ほんの少し文明化されている自然、それに観光地化以前のアルプスのように、文明化の程度がかなり少ないと思われる自然まで非一様的に広がっている。そこには、ヴォルマールの果樹園のように、全く人工化の跡が見えないまでに文明が加わった「自然」までが含まれているのである。

なお、晩年のルソーに会ったベルナルダン・ド・サンピエールは、ルソーが「かつては枝を刈り込まれていた大きな木が急激に自然のままの形に帰ろうとしている姿、人工が自然と戦いながらもおのれの無力を示しているにすぎぬ競り合い、そうした光景を深い興味をもってながめていた<sup>(59)</sup>」と伝えている。ここでは、自然の野生力に打ち負かされつつある「文明化された自然」が描写されている。

最後のまとめ④に、ルソーの「自然」のイメージから外れる自然として「荒れくるうすさまじい自然」があげられている。こうした荒らぶる自然の描写は、次章3の(3)で見られるように、人類の最初の状態やはらかな昔を伝える歴史的叙述には多く見いだされる。それは火山の噴火、地震、雷による森林火災、洪水、旱天などであるが、ルソーが眼前にしている自然の描写にはたしかに少ない印象がある。ルソーは、「何処にでも人工を求めて、人工が表れていないと決して満足しない<sup>(60)</sup>」ような文明化された自然、例えば「日傘なりの、扇なりの…木、見事な輪廓を与えられた…生垣、円い、四角い、三日月型の、卵型の芝生、……あらゆる種類の怪物なりに刈りこまれた…水松……贅沢に飾り立てた土地…持主の虚栄心と造園家の虚栄心しか<sup>(61)</sup>」認められない「自然」を嫌っている。人間に恐怖心を起させるゲルマンの森・未開のジャングルや荒らぶる自然、人工化の「富を……才能を見せびらかす<sup>(62)</sup>」

自然は、ルソーと自然との無媒介の澄明なまじわりや交感、交響を妨げるものであったのであろう。

以上いくつかの例示から見ても、ルソーが描写する自然空間の諸相は、一様でなく、大きな広がりを持つ。そこには自然の中に深く身を浸して、その諸相を見つめる自然への自己言及的態度を、近代化、産業化がスタートする18世紀中葉で取り得た一人の人間の姿を見ることができよう。

## ウ 自然空間の諸相描写の整理軸

ルソーの自然空間描写や意味づけを整合的にまとめあげて、そこから自然界をさまざまな形で語るルソーの多様なメッセージを残さず汲み取る方法については、これまでも多くの優れた研究がある。舟橋論文Aにおける自然C = 自然A + 自然Bもこのための一つの整理軸になるとも思われる。拙稿でも一つの試みとして、自然界にかかわるルソーの言説を①「環境」としての自然など自然環境としての自然②土地の私有化による不平等、都市化による都市問題など、社会環境としての自然③神を宿すマクロな自然への入口としての記号性を持つ植物や強者による弱者圧迫を象徴する島など記号環境としての自然の三つに整理するほか、ルソーの視力の特質をミクロな自然からマクロな自然を見通す透視力、同じ土地、植物から多様な意味を引き出す複眼力、自然環境の記号的認識を、自然を意味空間として立体的に把握する力と考へて、「ホロニックで立体的な透視力を持つルソー」というイメージを示唆したことがあった<sup>(63)</sup>。

ちなみに次章で触れる「化学論」などでのルソーの生態学的認識をこのイメージに照らして見ると、生態系は自然空間にひそむ秩序を透視する彼の透視力を、また本章で扱った、文明化された、あるいはsauvageな自然空間の非一様な諸相は、ルソーの複眼力を物語るものと説明できよう。ルソーの広くかつ深い自然界の観察・認識、想像と視力の鋭さは、いかに整序しようとも完全に整序しきれぬものとも限るまい。しかし、これを探求する努力を幾重にも積み重ねることにより、今まで見るべくして見えなかった、新たなルソー像が浮かび上がることが期待できるのではなからうか。

これに関連して、本章でもすでに一箇所引用したR.グリムズレイの「ルソーと空間の想像力」(注50参照)は、「物理的外部世界の経験の重要性をけして否定しなかったルソー」を、「独自の矛盾撞着する意識と統合の探求<sup>(64)</sup>」という性格上の二つの特徴から説明を試み、ルソーの空間世界 (le monde spatial) は、彼に神の力のすべてを示すだけでなく、彼固有の自然である本質的善性と統合を享受させたとしている。

これらは、ルソーの内的心理・性格上の特徴をいわば二つの整理軸として設定し、その空間世界の、想像をまじえた諸相を見ようとするものでもあろう。またこの論稿では、愛する女性の同伴がルソーの自然空間をより明澄で純粹 (clair et pur) なものにするとか、水への情熱的愛は、古くから精神分析的に母の乳房への回帰願望と見なされてきたが、水のイメージがコンスタントにあらわれていることは、愛情を満喫していた幼少期への、つまり、ルソー自身が水と関連づけて述べている、ジュネーブ時代の純粹無垢の時期への回帰願望を示すものともいえるであろうなども指摘している。

今後こうした整理軸の研究が、より発展することが望まれよう。

## 3 ルソーの生態学的認識

ルソーの自然界に対する生態学的な観察、感覚、認識、考察などは、これまでの管見の範囲では、『不平等論』(以下の訳文は、本田喜代治・平岡昇訳による岩波文庫版、1990年による)のほか「化学論」、『言語起源論』にあらわれていると思われる。以下その内容について触れてみたい。

## (1) 『不平等論』

まず『不平等論』原注(d)に示されたものを次に掲げる。以前の拙稿<sup>(65)</sup>でも述べた通り、彼は最初に第1章で登場したビュフォンの『博物誌』から下記①の一文を引用したあとで、②～④を述べている。これらは、現代の生態学から見ると、①は植物、土壌、水、動物の間の物質的な関係を説明しているので、「無機的自然と生物とが、物質とエネルギーの循環というきずな」によって形成する「生物経済学的なシステム<sup>(66)</sup>」である「生態系」の存在を指摘しているともいえよう。「生態系とは単に、生態学的にみた自然というのと、具体的には変わりはない<sup>(67)</sup>」とのことであるので、ルソーはここでいわばビュフォンの一文を借りて、生態学的に自然を見ているといえる。そして後段では、人間の木材・草木の多量消費活動による生態系の破壊が指摘されている。

① 植物はその養分として、土地からよりも空気や水からはるかに多くの物質をひき出すので、腐敗するにあたっては土地からひき出したよりも多くのものを土地に返すことがある。なお、その上に、森は水蒸気をひき止めることによって雨水を決定する。こうして、人が永く触れないで保存するような森林のなかでは、植物のために役立った地層 (la couche de terre) が非常に増大するだろう。ところが動物は土地からひき出すよりも土地に返すほうが少なく、また人間は火やその他の用途のために木材や草木を多量に消費するので、その結果として、人の住む地域の植物地層はたえず減少し、ついには中央アラビアやその他非常に多くの近東の地方のように変わってしまわねばならない。この近東は事実、もっとも古くひとの住まった風土なのだが、そこには塩と砂だけしか見出されないのだ。というのは植物や動物の一切の他の部分は気化してしまうのに、非揮発性の塩分だけは残るからである。『博物誌』『地球理論の証拠』(第七条) …(『不平等論』原注(d) P.139. O.C., t, III, p.198)

また次の「動物によってなされる植物質の消耗」を指摘する②の前段と③が、動物の植物界への依存関係、②の後段が森林の保水作用と呼ばれるものの指摘と見てよからう。

② 動物によってなされる植物質の消耗を埋めあわせるような植物があるとすれば、それはとりわけ森の木であって、その梢や葉が集まり、他の植物よりも多くの水分と水蒸気とをわが物にするのだ。(『不平等論』原注(d)P.140)

③ いっそう重要な指摘は、木々の果物は他の植物が供給しうる以上に豊富な栄養を動物に供給する……(『不平等論』原注(d)P.140)

なお下記の④は、「植物に適した物質」が土壌中にあることをルソー自身の言葉で伝えているもので、植物という生活体(主体)と生活の場(環境)との相互的な関係の存在を示唆しているものと思われる。こうした土壌が植物に適した物質を供給する作用は、生態学で「環境が主体におよぼす作用……アクション<sup>(68)</sup>」と呼んでいるものの一つではなかろうか。

④ 土壌の破壊、すなわち植物に適した物質の損失は、土地がますます開拓され、いっそう勤勉な住民がますます多量に土地のあらゆる種類の物産 (productions) を消費するのに比例して増大するにちがいない……。(『不平等論』原注(d), P.140. O.C., t, III, P.198)

## (2) 「化学論」

ア 「化学論」について

『不平等論』は、1753年～54年に執筆、完成し、55年に出版されたが、ルソーの生態学的

認識は、1745年～1747年<sup>(69)</sup>に著したとされる「化学論」にすでにあらわれている。その内容の説明に入る前に、この「千二百ページの大草稿<sup>(70)</sup>」について若干説明を加えておきたい。

「化学論」は『告白』でも数回にわたって言及されている。それによると、ルソーは化学について、1732年～33年（ルソー20才～21才）頃には、「植物学も化学も解剖学も、それをたねに終日わたしが笑談まじりのひやかしをいって、ときどきほっぺたをたたかれることにしか役立っていなかった<sup>(71)</sup>」ものであった。しかし1743年には、ルエルというディドロも学んだ化学者について、ルソーが当時その「秘書」を勤めており、「科学アカデミーに入りたがっていて、化学実験室を作っていた<sup>(72)</sup>」デュパン・ド・フランクイユと「いっしょに化学の勉強をはじめ<sup>(73)</sup>」、「やっと初歩がわかった程度のこの学問にかんして、二人で曲りなりにも本を書きはじめた<sup>(74)</sup>」。結局この本は生前には出版されず、ルソーはその原稿を彼の没年の1778年に「未発表の作品としてムゥルトウに託した。<sup>(75)</sup>」とされている。その後この原稿は「1世紀以上の間、J.-J.ルソーの友人の子孫の手の中にあつた<sup>(76)</sup>」が、このムゥルトウ（Paul-claude moultou）の曾孫娘（arrière-Petite-fille）である、シュザンヌ ニコル（Suzanne Nicole）の家から、デュフル（Théophile Dufour）によって発見され、1904年ニコルからジュネーブ市に寄贈<sup>(77)</sup>されたものである。

この寄贈原稿は『ルソー協会年報』(Annales de la société Jean-Jacques Rousseau) の第12巻・13巻（1918-1919.1920-1921）に掲載された。そこに序文を付したM. ゴーチエ（Maurice Gautier—理化学博士）は、ルソーのこの「未完の仕事」の公刊について、現代の我々からすると多くの誤謬や欠点はあるが、これが一つの草稿にすぎないことを考えるとあまり厳格な判断を持ち込むことは避けて、そこにルソーの才能の消し難い足跡を留めていること、ほとんど今日まで知られていなかったルソーの一面が明示できることを公刊理由としたい旨を述べている<sup>(78)</sup>。そしてもしこれが生前に完成され、公刊されていれば、当時の化学の本はラテン語で書かれているか、あまりにも無味乾燥なものであったので、ルソーが皮肉を浴びせかけている専門家よりも、教養があり、勉強する意欲のある人々向けに、研究書としてより、化学知識の普及書として役立つことだろうと推測している<sup>(79)</sup>。またルソーの伝記を書いたJ.ゲノ（Jean Guéhenno）は、「内容には独創性もなく……当時權威のあつたセナックの『化学新講義』という本に従っただけのようなところがあるが……この作品は少なくともジャン＝ジャックがこの領域でたんなる愛好家ではなかったことを示している。……彼を化学者というわけにはいかぬが……むしろ彼のなかにある詩人的要素、それもこの頃ビュフォンが自然全体を抱擁し、その深いメカニズムを認識しようと熱意を燃やしたのと同じ意味で、詩人的要素を示すもの<sup>(80)</sup>」と評している。我々は次に、「化学論」においてルソーが自然の「深いメカニズム」を認識しようとした熱意の一端を見ることにしたい。

イ 第2編第1章「自然のメカニズムについて」に見る生態学的認識

ルソーが述べる所の一節を仮に伝えてみると、次のようになる<sup>(81)</sup>。

我々は……雪と緑がかわるがわる地表を覆うのを見たり、水分が太陽の熱により蒸気となって上昇し、露となって落ち、雪となって結晶したり、萎れた緑を蘇生させ、育て上げにくる有益な雨に姿を変えるのを見ている。

また緑に栄養を与える役目の汁液（sucs）や塩分が、無数かつ大量の小孔から植物にもぐ

りこんでいくのを見る。全植物の必要物を根に供給するのは、土壌である。そこからまだ未純化、粗製の汁液が、そのために奉仕する小さな、数限りない運河の中で自らを浄化し微質化して、植物のさらに微小な部分部分を養うのに適したものとなっていく。

さらに植物のからだが自らの生命と栄養を見出すのはまさに水においてであり、また大気から直接自ら必要とする糧 (alimens) を受け取るのは、他ならぬ植物の葉や樹皮の小孔を通じてである。

一方動物たちは……誕生以来植物とは別の機能やメカニズムがあってすぐに空気を吸い、自らその存在を維持していく。自然は彼らに適した糧を選んだり、逆に有害物を排除することを教えている。…その身体の中には消化器官が用意され、よく知られている選択と分離によって、その身を養ったり、力を補なうのに適した滋養分しか通さないように、また残りの不要なものは外に排泄されるようになっていく。そしてこの残滓は、一つのすばらしい経済 (une économie admirable) によって、より活気ある緑を通じて土壌を豊饒なものにしたり、自然の絶え間ない産出活動によって生じる損失分を埋め合わせするのに使われているのである。

動物たちに豊富な栄養ある糧を供給するのは、植物たちの番である。こうした循環 (Circulation) によって、自然は絶えず自らを新しく生れ変らせ (se renouvelle), 力強く身を保ち、この思慮深い交互継起 (Prudents alternatives) のおかげで、常に若々しい様子を示しているのである。

これらに気温や不可避的な気候・寒熱・乾湿の程度、土壌、大気、水の質といった、外部的なものを追加しよう。また内部的なものとして、さまざまな生物界では、彼らに適した糧を供給するのに必要なすべての準備がととのっている。これらが消化、分解、炉過、発酵、石灰化……である。

以上によって、生体 (corps organisés) の発達における自然 (la Nature) のメカニズムについての大きな観念が得られる……

やや長い引用になったが、『不平等論』での『博物誌』からの引用部分と比べると、同じように生態学的に見た自然がえがかれているが、土壌と植物をつなぐ根の働きなど、より細部にわたる描写があることや、『不平等論』で生態系を破壊しに登場する人間が、少なくともここでは姿をあらわしていないことがわかる。

この「化学論」のルソーの記述を整理してみると、次のようになる。

- ① 無機的環境要因の有機物への作用として、「太陽の光、大気、水の、植物との関係」(「アクション」作用)。
- ② 生物の無機的環境への作用として、「動物の排泄物の、植物、土壌との関係」(「リアクション」作用)
- ③ 生物間の共生作用として、「動物と植物との関係」
- ④ 生物をとりまくさらに大きな無機的要因 (外部的なもの) としての、気温、気候、寒熱、乾湿の程度の指摘

これらの整理を通じてさらに示唆されることをまとめると、次のようになる。

- ⑦ ルソーが自然界を、その文脈からして生物の生活に影響を及ぼす、我々のいわゆる「環境」として見ていること。

- ④ その環境としての自然が、多数の無機的、有機的要因から総合的に成り立っていることを感得していること
- ⑤ 上記①、②に見るように無機的要因と有機的要因の間には、アクションとリアクションの交互作用があること、また動植物間にも共生関係が成立していることに気がついていること
- ⑥ なお、自然界には温度、乾湿度など、さらに大きな無機的要因（外部的なもの）が働くことを示唆していること

またとくに注目されることはルソーが、動物の排泄物の作用を「すばらしい経済」（圏点引用者）と表現していることである。これは現代の生態学が、経済という語を比喩的に使って「生物社会における物質およびエネルギー循環の問題」を「生物経済学」と言ったり、この循環の「生物経済学的な複合系…システムを生態系<sup>(82)</sup>」と呼んでいることとも一部符合するところがある。さらにそのほかのところでも、植物の動物への栄養供給を「循環」と表現したり、これらが交互継起して自然界がリフレッシュされるとしたところは、アクション、リアクションの作用の指摘とともに、生態学が重視する、物質やエネルギーの流れやサイクル、運動、調節などの概念の実体を感じ取るルソーの鋭い感覚、あるいはゲーノがいう、ビュフォンの熱意にも似た「詩人的要素」を含む、感性的な「自然知」を示唆するものとも思われる。

生態学の現代的発展は、19世紀以後ヘッケル（Ernst Heinrich Haeckel）やエルトン（Charles Sutherland Elton）、タンズレイ（Sir Arthur George Tansley）などによって進められたとされるが、その基礎的概念の萌芽は、アリストテレスの『動物誌<sup>(83)</sup>』やその弟子のテオフラストスの『植物誌』まで遡ることができる<sup>(84)</sup>とのことである。ルソーの生態学的認識については、ビュフォンのそれとともに、後に触れるように、生態学史研究の領域からも検討を加えてみる必要があるのではなからうか。

なお、ルソーは「化学論」の中で「万物の能動的原理（le principe actif）」は、「一つの知的存在（un Être intelligent）」で、この「永遠の存在は、疑いもなくただその力と意志の無媒介の協力（Concours immédiats）によるだけで宇宙を産みかつ維持することができたであろう<sup>(85)</sup>。」と述べている。この一節には、後年の『エミール』における、「ある英知」（une intelligence）や「思考する能動的存在者」（un être actif et pensant）などの表現ともよく似た観念が、『エミール』に先立つ十数年前の「化学論」にすでにあらわれていることをうかがわせるものがある。

### （3）『言語起源論』

ルソーの生態学的な感性は、『不平等論』の断片として書かれた『言語起源論』にも若干見られる。彼は次の一文で、「はるか遠い昔」大自然の大変動が自然界全体の体系維持、均衡回復に作用していること、またその変動が動植物界の弱肉強食関係が極限にまで進まないように働いていることを述べているように思われる。

- 1 自然は火山を噴火させ、地震をひき起こし、烈しい稲妻で夜を焼きつくしていた。当時は雷の一撃や、一度の洪水、旱天だけで、いまなら無数の人間の手が百年もかけてやるようなことを、ほんの数時間のうちにやりとげってしまった。そういうことがなければ、どうして自然の体系が維持され、均衡が保たれることになるのか、わけがわからなくなる。動物の世界

でも植物の世界でも、大きな種が小さな種をやがては呑みつくしてしまうことになったであろう。地球全体がそのうちに、強い木や狂暴なけだものだけでおおわれてしまい、けっきょくはすべてが滅びてしまったであろう<sup>(86)</sup>。

また下記の文は、動物には食べられる種と食べる種、つまり我々がいうところの、生態的地位間の「食物連鎖」があり、この兩種間に、ルソーが「振り子のような運動」とよぶ均衡作用が働くという「ある人の主張」を紹介している。ルソーはしかし、この主張に疑問を呈している。

2 ある人の主張では、いわば自然な作用と反作用によって、動物界のさまざまな種はつねにバランスをとりもどし、それが均衡のかわりになって、自分たち自身で種を維持しているらしい。つまり食うほうの種が、食われるほうの種を犠牲にしてふえすぎていくと、やがて餌がなくなってしまうので、今度は食うほうの種が少なくなり、食われる種のほうがまた少しずつふえてくる。そうするうちにまた、食うほうの種に豊かな餌が提供されることになって、食うほうはまた数がふえ、食われるほうは減っていくというわけだ。けれどもそういう振り子のような運動は、少しも本当のように思えない。この方法では、餌食になる種がふえて、それを食う種が少なくなる時期があることになっているが、そういったことは、私にはおよそ理に反したことのように思える<sup>(87)</sup>。

上記2の文は、1の注として付けられたものだが、どちらも動物の弱肉強食関係に言及している。ルソーは、この関係の均衡をどうやら動物界自体にある運動（生物間競争）よりも大自然にある運動（自然変動）によって説明したかったものとも思われよう。

#### (4) ルソーの生態学的認識を検討する意味について

ルソーの「自然」には生態系の存在など「環境」としての「自然」があったことを検討することにどんな意味があらうか。これを①本稿で述べてきたことに即しての意味、②より一般的な、いわば、ルソー研究全体にかかわる意味の二つに分けて考えてみると、次のようになる。

① まず第1章で扱った18世紀前期までの「自然」の多義性との関連については、現代の我々からすれば、ボイルの4 ある存在における運動の内的原理 5 事物の安定した秩序などに、またダランベールの1 世界の体系、4 事物の秩序…第二原因の連鎖などに、メルシエでは、3 種に属する特性、1 根本的根源的諸性向などの意味の中に、生態学的認識が位置づけられそうに見られる。しかし、18世紀前期までの「自然」が、当時の博物学の発展をベースにしてのちに見るようにアリストテレス以来知られていたとされる生態的自然を含みうるほど多義的であったか否かをやや立ち入って検討する必要がある。この点はさらに「自然」の語義史と18世紀生態学（博物学）史の研究の両面から検討を加えるべき課題であらう。一方百科全書派とルソーの自然観の対立問題に関しては、後者の生態学的認識の存在はますます前者から後者を区別する意味を持つことになるものと思われる。

さらに第2章で見たルソーの自然観の構造と自然空間の諸相の関連では、生態系は本来、いわゆる《生まれる自然》＝自然Bに属すると思われるが、舟橋論文Aでは、自然Bが無機物質界を指して「宇宙」または「世界」を意味しているようでもあり、生物的世界と非生物界の交流を含む生態系の位置づけが微妙になる。ルソーは自然の動物、植物、鉱物「三界の調和……美しい体系の無限の広がり」との同一化や「植物組織の観察、生ける器械の動きと営みの追及、その一般的法則とさまざまな構造の原因と目的の探求<sup>(88)</sup>」に「成功」して、自然Aを透かして見たり、生物種の多様性の生命感溢れる光景に「超自然的なもの」を感じ

ているので、生態的自然は、自然Bの概念が生物的自然を含むように広げられて自然C=自然A+自然Bの構造の中に含まれることになる。なお今後、ルソーが「化学論」の中で語る「一つの知的存在」を、同じ「化学論」における生態系観察からも見通しているのか、その言説の存否も確認していきたい。一方舟橋論文Bの自然征服思想と自然観の変遷におけるルソーの位置づけに関しては、ルソーを生態的自然観の持主として、改めて取り上げることが可能となろう。

なお、岩波新書の「第5章 自然のよろこび」とのかかわりについてはすでに述べたように、「生物的自然の協和」の内容の一つをこの生態的自然の協和（自然界の経済、循環、交互継起など）が満たすことになるものと思われる。

② ルソーの生態学的認識の、ルソー研究におけるやや一般的な意味に関連しては、拙稿<sup>(89)</sup>ですでに、ア 文明化が「植物に適した物質の損失」を招くなどの言説を示して、ルソーの文明社会批判の理由の一つを説明できる意味があること イ これらを通じて18世紀フランス啓蒙思想は、環境思想を含みつつあったことが示唆できること の2点をあげた。以上は『不平等論』におけるルソーの言説をもとにしたものであるが、今回の「化学論」の中の生態学的認識の検討によって、さらに次の意味を追加することができるものと思われる。

ウ 上記イをさらに補強し、啓蒙思想における環境思想の所在をより明確にできる。これは前述の通り①で触れた自然征服思想における、ルソーの位置づけの再評価にも役立つ。また『不平等論』完成以前に、あるいは原注(d)で引用されたビュフォンの『博物誌』の発行（1749年に第1巻『地球の理論』、第2巻『生殖の構造』、『人間の博物誌』刊行<sup>(90)</sup>）以前に、ルソーが生態学的知見を得ていたことが確認され、ルソー環境思想の展開過程の検討のために新しい資料が提供される。

ただし厳密には、ルソーがその知見をどこから得たのか、どこまでが自分自身の考察によるものかを吟味する必要がある。ゴートイエはオランダの植物学者、物理学者、化学者のH. ブールハーフェ（Hermann Boerhaave-1668~1738）の「影響」（l'empreinte）がこの第2編の最後まで続いている。しかしルソーは、ブールハーフェに多くの点で同意しておらず、その場合には彼に反対することを恐れていないと述べている（注76, P. XI X）。「化学論」の全体にわたって、本文に関連がある化学書の著者等の注記が数多くあるが、本稿で引用した第2編第1章の部分には、この種の注記は全くない。ともあれ、今後この両者のテキスト比較に興味を寄せられる。

なお、スタロバンスキーは、この「化学論」からいくつかの文章を引用し、彼の“透明な”ルソー像の傍証の一助としている（山路昭訳『ルソー―透明と障害』みすず書房、1993年、412頁~415頁）。

エ ルソー思想はこれまで、哲学、教育、文学、音楽、政治、社会など非自然科学系の分野からの研究にほぼ任されてきた感がいなめない。今回、彼の生態学的知識や化学の知識など自然科学系の分野からの研究になじむ領域があることが改めて認識でき、ルソー思想の全体像を文科系、理科系の両面から探求する必要性がいっそう示唆される。

オ ルソーは前述のように、「自然の三つの領域の階調」（l'harmonie des trois règnes—O.C., t. I. P.1062）の魅力を述べている。生態学が考える世界の三つの秩序、即ち①基層にある物理的秩序②中層の生物学的秩序③最上層の社会的、文化的秩序<sup>(91)</sup>に即していえば、①、②についてのルソーの認識を検討するとともに、その文明批判や宗教・倫理思想な



ど②との関連をも検討することで、これら三つの秩序観から見た、ルソーの広義の「自然」認識の構造に新しい光をあてる可能性がうかがわれる。またルソーの①、②を対象とした感覚的、文学的、生態的な自然表現や③に関するパラドキシカルな思想表現に満ちた諸著作と旧制度社会、技術の変化との関連に、現在注目されている「文化生態学<sup>(92)</sup>」の観点から接近してみることも考えられよう。

ルソーの生態学的認識のより詳細な分析は、ルソー環境思想研究に生態学、生態学史、環境史学、比較制度史学、文化生態学からの参加を、さらに要請する一因となるのではなかろうか<sup>(93)</sup>。

## 結び

ルソーはよく、「近代と、さらに近代をこえるものを構築していた<sup>(94)</sup>」とか、ルソーの「近代思想の父祖としての地位がようやく確定したかに思うとき、今度は近代の社会と思想がいきづまる状況をしだいにあらわしてきて、ルソーはにわか近代の超克を指導することになる<sup>(95)</sup>」などと言われる。

ルソー思想の中に、改めて18世紀啓蒙思想における環境思想のひらめきを見ようとするのは、環境問題に直面する近代の「超克」を求めるものとも評しうるかもしれない。

古来「自然」の一語は、これまでもいくつかの時代の転換期に繰り返し注目を集めてきた。再び転換期の入口に立つと言われる今日、「自然」の語は、また耳目を集めているようである。今後の社会と人々は、「自然」の多義性の中の、どのような語義に注目し、その発展と多様化を期待するのであろうか。あるいは「近代をこえるもの」は、かつてルソーがそうしたように、18世紀前期の多義性の中にもないような、新しい独自の意味や造語を作り出すことを求めてくるのであろうか。近代化・産業化の長い圧迫により、その豊かな多義性を奪われてきた「自然」の語は今、新しい時代に向って、自己の修復と成長を訴えつつあるものと思われる。

## 注

- (1) K・リーゼンフーバー「序言」上智大学中世思想研究所『中世の自然観』創文社、1991年、3頁。
- (2) 荒井宏祐「J.-J.ルソーにおける「自然」・「社会」・「環境」認識と「環境教育」をめぐる考察序説」、『文教大学国際学部紀要』第8巻、1998年3月。
- (3) 荒井宏祐「J.-J.ルソーにおける、自然環境の認識と社会的ジレンマ問題—考察序説」、『文教大学国際学部紀要』第9巻第1号、1998年10月、3頁～9頁。
- (4) 上掲(2)でも扱ったが、今回はより詳しく見た。
- (5) デイドロ、ダランベール編、桑原武夫訳編『百科全書 序論および代表項目』岩波書店、1971年、19頁。
- (6) Roger Mercier, *La Rehabilitation de la nature humaine (1700~1750)*, 《La Ballance》, Villemonbille, 1960.p. 9。
- (7) 廣川洋一『ソクラテス以前の哲学者』講談社、1997年、187頁。
- (8) 廣松渉ほか編集『岩波哲学・思想事典』岩波書店、1998年、636頁～641頁にこの間の流れが簡潔に紹介されている。

- (9) ボイルの専門分野は、ディヴィッド・クリスタル編集、金子雄司ほか日本語版編集『岩波＝ケンブリッジ世界人名辞典』岩波書店、1997年、981頁と前掲(6)による。同(8)では、「自然神学者」(1468頁)との表現も見える。
- (10) 前掲(6)。
- (11) 訳語の選定には、平岡昇「ルソーの「自然状態」についての試論」『思想』1971年9月、岩波書店、30頁～31頁を参照した。
- (12) ラテン語で、ダランベールの分類の3のquidditéと同義とのこと。「同一種類の多くの個物に共通するものと見られた場合の本質」(『小学館ロベール仏和大辞典』、2004頁)。前掲(11)では「存在の本質を形成するもの」とされている。
- (13) 前掲(6)。
- (14) 前掲(6)、P.10。
- (15) 前掲(6)、P.11～P.18。
- (16) J. パスモア、間瀬哲充訳『自然に対する人間の責任』岩波書店、1998年、5頁。
- (17) *A Free Enquiry into the Vulgarly Received Notion of Nature*で、パスモアは、1744年版のボイル全集第4巻、P.363から引用し、メルシエは1686年版のP.14から引用とのこと。
- (18) 前掲(16)、15頁～16頁。
- (19) 前掲(16)、16頁。
- (20) 前掲(5) 多田道太郎『『百科全書』について』397頁。
- (21) 桑原武夫「はしがき」同編 京都大学人文科学研究所報告『フランス百科全書の研究(1751～1780)』岩波書店、1954年。iii頁。
- (22) 同上。
- (23) 前掲(11) 34頁。
- (24) 前掲(21) 243頁。
- (25) 同上。
- (26) 前掲(2)、(3)参照。
- (27) 『名古屋大学教養部紀要』第22集、第23集(1978年、79年)に(1)、(2)が、『名古屋大学総合言語センター言語文化論集』II-2、III-2、VI-2(1981年、82年、85年)に(3)、(4)、(5)が掲載。
- (28) 同上(4)、III-2、1982年、109頁。
- (29) 同上(3)、II-2、1981年、161頁。
- (30) 同上、169頁。
- (31) 同上、165頁。
- (32) 同上。
- (33) 同上。
- (34) 同上 165頁～166頁。
- (35) 同上 167頁。なお、舟橋は「精巧な時計仕掛けである無機的物質世界をルソーは多くの場合「宇宙」または「世界」と呼んでいる。」としている(同上163頁)。
- (36) 同上166頁。
- (37) 同上169頁。
- (38) 『名古屋大学言語文化論集』XIII-2、XIV-1、XIV-2(1992年、93年、94年)に(1)、

- (2), (3) が掲載。
- (39) 同上XIV-1, (1), 105頁。
- (40) 同上101頁。
- (41) 同上103頁。
- (42) 同上117頁。
- (43) 同上XIV-2, (3) 102頁。
- (44) 桑原武夫編『ルソー』岩波書店, 1962年。
- (45) 第5章は, 多田道太郎 執筆。
- (46) 同上97頁。
- (47) 同上。
- (48) ルソー著, 桑原武夫訳『告白』上 岩波書店, 1993年, 247頁。(以下『告白』)
- (49) 同上。
- (50) Ronald Grimsley, “Rousseau et l’imagination de l’espace”, *Annales de la Société Jean-Jacques Rousseau*, Genève, tome 39, 1972~1977, P.518。以下A.J.J.R.
- (51) 原語引用は, CEuvres complètes, tome II, Pléiade, 1964年, P.441。以下本文ではO.C., t. II, P.441などと記す。
- (52) O.C., t, II, P.518。
- (53) 吉本秀之「ロバート・ボイル, 人と仕事」伊東俊太郎ほか編集『ボイル 形相と質の起源』科学の名著第II期8 朝日出版社 1989年, CV頁~CVi頁。
- (54) 同上CVi頁。
- (55) 前掲(52)。
- (56) ルソー著 安土正夫訳『新エロイーズ』(三) 岩波書店, 1961年, 129頁。
- (57) 同上, 128頁, O.C., t. II, P.471。
- (58) 同上, 129頁。
- (59) ルソー著 今村一雄訳『孤独な散歩者の夢想』岩波書店, 1994年, 174頁。
- (60) 前掲(56), 142頁。
- (61) 同上。
- (62) 同上。
- (63) 前掲(3) 参照。
- (64) 前掲(50) P.49。
- (65) 前掲拙稿(2), (3) でも取り上げたが, 今回は現代の生態学上の知見との関連を見た。
- (66) 梅棹忠夫/吉良竜夫編『生態学入門』講談社, 1976年, 122頁。
- (67) 同上。
- (68) 同上, 35頁。
- (69) この執筆年は, R.Trousseau et F.S.Eigeldinger *Dictionnaire de Jean-Jacques Rousseau*, Honoré Champion, Paris, 1996, p.446 による。
- (70) J. ゲーノ著, 宮ヶ谷徳三訳「第一部 『告白』の余白に」『ルソー全集』別巻1, 白水社, 1981年, 171頁。
- (71) 前掲(48) 257頁~258頁。
- (72) 前掲(70) 170頁。

- (73) 『告白』中 107頁。
- (74) 同上。
- (75) 桑原武夫編『ルソー研究 第二版』岩波書店, 1970年, 「ルソー年表」82頁。
- (76) A. J. J. R, t, 12, P. V iii.
- (77) 同上P. V ii ~ V iii.
- (78) 同上P. X X ii ~ X X iii.
- (79) 同上P. X X i。
- (80) 前掲 (70) 172頁。
- (81) 前掲 (76) P. 44 ~ P. 50。
- (82) 前掲 (66) 107頁。
- (83) 沼田真「生態学からみた環境教育」伊東俊太郎編集『講座 文明と環境』第14巻 朝倉書店, 1996年, 138頁。なお, アリストテレース 島崎三郎訳『動物誌』(下) 岩波書店, 1999年には「動物の生息地の相違」(103頁)が, また(上)には「動物界の諸類」(35頁)が述べられている。
- (84) 同上 沼田 138頁。
- (85) 前掲 (76), P. 46。
- (86) ルソー著 竹内成明訳『言語起源論』白水社, ルソー選集6, 1986年, 176頁。
- (87) 同上。
- (88) 前掲 (59) 119頁。若干文章を省略した引用になっている。
- (89) 前掲 (2), (3) 参照。
- (90) 荒俣宏監修 ベカエール直美訳『ビュフォンの博物誌』工作社, 1991年, X ii 頁。
- (91) 前掲 (66), 31頁。なお, 生態系の基礎概念については, このほか, D. F. オーエン著, 市村俊英訳『生態学とは何か』岩波書店, 1977年。半谷高久 松田雄考編『都市環境入門』東海大学出版会, 1977年。アンナ・ブラムウエル 金子務監訳 森脇靖子/大槻有紀子訳『エコロジー (起源とその展開)』河出書房新社, 1992年, 前掲 (83) 沼田などを参照した。
- (92) 綾部恒雄編『文化人類学15の理論』中央公論社, 1986年, 188頁参照。
- (93) 安達新十郎『大革命当時のフランス農業と経済—アーサー・ヤング『フランス旅行記』の研究—』多賀出版, 1981年, 97頁以下に「森林の…耕地への転換」などのヤングの考察が紹介されている。またすでにこれまでに引用した, 関連文献例を次に再掲する。  
メルシエ著, 原宏編訳『十八世紀パリ生活誌—タブロー・ド・パリー』(上) (下) 岩波書店, 1989年。クライブ・ポンティング著, 石弘之/京都大学環境史研究会訳『緑の世界史』上, 下, 朝日新聞社, 1994年。河合義和著『近代憲法の成立と自治権思想』勁草書房, 1989年。河合義和著『公害法体系—法と行政の接点』丸善株式会社, 1970年。河合義和著『憲法の理念と行政法の現実』評論社, 1979年。
- (94) 前掲 (44) 126頁。
- (95) 原聰介「消極教育の論理と課題—ルソーは近代教育の父か—」『世界教育史大系 10 フランス教育史II』講談社, 1975年, 285頁。